

商人への道

岩崎弥太郎①

一龍齋貞花

講談師

「将来おれは必ず世の中に名を成してみせる、出世してみせるぞ」

大河ドラマ主人公の、坂本龍馬以上に強烈なアピールをしている岩崎弥太郎。天保5年12月地下浪人岩崎家の長男として誕生、いたずら好きのガキ大将、大法螺吹いて平気で人とぶつかる。村の高台に登り眼下に広がる海を眺め、「大人になったら太平洋を横断するんだ」と少年時代から大きな志を持っていた。

江戸で安積良齋あきかこんさいの門に入り一心に学んでいたが、父が庄屋の不正をなじたため袋叩きにあい、急いで土佐へ帰り、訴え出たものの庄屋から賄賂をもらっている奉行は、取り上げない。怒った弥太郎は奉行所の壁に奉行を批判する落書きを大書したため、牢に入れられてしまった。牢の中で全く学問が出来ず落ち込んでいると、「オイ若いの、商売で身を立てるつ

もりなら算盤を覚えなければいかん、商売がやりたかったら商いのやり方を身につけるのだ」同じ牢内の樵きこりが商いのやり方を教えたという。樵がなぜ算盤や商いの道を知っていたのか不思議ですが、人生なにがきっかけになるか、この樵に出合わなかったら商売に関心を持たなかったかもしれません。牢内というマイナスをプラスに転換させたのです。その後出牢したものの隣村で謹慎。近くの村で吉田東洋も蟄居し塾を開いていた。ここで学びやがて2人共許され、東洋は再び藩政を司どることになり、東洋の塾で学んだ縁から抜擢される弥太郎。長崎へ市場調査の役、長崎で漢学者、蘭方医、西洋砲術家、通訳、清、オランダ、英国の商人に接触、この時の出会いが後に土佐商会の経営をまかされた時、大いに役立った。

ところが英雄色を好むと申しますか、遊女に入れ込み酒も好き、藩の金を使い込み解雇され、再び田畑を耕していたが、東洋が目をつけてくれたのか郷士の株を買い士分となり、郷士の娘喜勢と結婚。ところが東洋が武市半平太のために暗殺され、出世の道が途絶えた弥太郎は、荒地の開拓、1年で1町歩もの田を開き、洪水を守る堤防をも築き、綿の栽培、薪や炭を焼き商人へ卸しわずか3年で岩崎家を再建。かくするうち政権が変わり、武市は切腹、東洋の甥後藤象二郎が実権を握り、貿易によって富国强兵を押し進め

ようと土佐商会を開設し、自ら長崎で外国商人と取引をしていたが、武士の商法、おまけに日本人最初のルイ・ヴィトン愛好者、妻が亡くなり祇園の芸者を後妻にするほどの派手な遊び好きで、遊興費も含め20万両もの借金を作り、「そうだ岩崎を呼んでやらせよう、あいつの知恵を借りよう」かくして弥太郎は長崎へ再び着任。

長崎土佐商会 弥太郎頭角を表す

後藤は、「薩摩、長州に負けているわけにはいかん、坂本龍馬は脱藩者だが、亀山社中を使って薩長ばかりか大洲藩とも取引しているようだ、この龍馬を利用しない手はない」この時亀山社中は、暴風で船が沈没したり社中存続の危機にあり、龍馬は土佐藩の援助を期待して後藤と話をまとめ脱藩を許され、亀山社中を基に土佐海援隊発足。龍馬はすでに長崎で取引をし、芸者のお元を鼻根にして丸山で遊んでいた。弥太郎も英国商人オールトやグラバー、米国商人ウオールスなどと親しくなり、グラバーは芸者のつと馴染みで毎晩のように丸山で遊び、弥太郎も芸者の青柳を可愛いがり同席させる。グラバーは貿易商人だが、他の外国人同様あくどい商売もやっていた。

「私は、尊皇派でも幕府方でもない、山内家と対立している大名であろうと商売は別、この長崎では窮屈な考えでは商売は出来ないと思っています」

土佐で作られる樟脳、ヨーロッパでは防虫剤、香料、医薬品、火薬の原料などに使われ、10斤6kgで10両という高額で取引されるようになり、重要な産物となり、武器や船購入に役立ち、国内では上質の鯉節を高値で販売する。

土佐藩は、薩長に負けるなど武器や蒸気船の購入をどんどん弥太郎に申しつける。土佐商会自体金があるわけでもなし、後藤のこしらえた借金もあり樟脳だけではまかないきれない。そこで弥太郎はいろんな手を使わざるを得ません。月賦で払うとって商品を納入させ、その後もういらなくなったとって返品するふりをしたり、月賦をとどこおらせて借金を踏み倒すそぶりを見せて代金を大幅に値切ってしまう。返済期限が過ぎてもうまくごまかすなど、こんなことをしたりしたので岩崎はあくどいことをやったといわれたのも仕方ありませんが、藩の命令でもっと購入しろといわれ致し方ないことも確かでした。

慶応4年4月、大阪が外国にも開港、外国の商人は商都大阪へ続々と移動、土佐藩も長崎の商会を閉め、岩崎は大阪土佐商会の責任者となって明治2年大阪へ。度々の流転を乗り越えて商人の道に進みこれより豪商へと大きく歩み出すのですがその道は決してスムーズではありませんでした。近代日本経済の礎を築こうというお話は次回連続に。 ポポ